

## 27年度版教科書つれづれ 17 「天気を予想する」(光村図書・小学5年)の巻(後)

加藤 郁夫 (読み研事務局長)

7段落も、文章が変わっている。旧版は次のようであった。

それでは、そうした突発的・局地的な天気の変化を予想する手立てはないのでしょうか。

新版は次のようである。

それでは、突発的・局地的な天気の変化を予想するために、できることはないのでしょうか。わたしは、いくつかの手立てがあるのではないかと考えています。

この箇所に関わっては、二つのことを述べる。

一つは、この文章の述べ方についてである。この文章は、1段落・4段落・7段落で問いを出し、その問いにその後、答えるという述べ方になっている。その箇所をもう一度旧版で見ると以下のようにになっている。

① ~的中率は、どうして高くなったのでしょうか。それは、だいたい次の二つの理由によるものといっています。

④ では、さらに科学技術が進歩し、国際的な協力が進めば、天気予報は百パーセント的中するようになるのでしょうか。それはかなりむずかしいというのが、現在のわたしの考えです。

⑦ それでは、そうした突発的・局地的な天気の変化を予想する手立てはないのでしょうか。

新版は次のようである。

① ~的中率は、どうして高くなったのでしょうか。それは、主に、次の二つの理由によるものといえます。

④ では、さらに科学技術が進歩し、国際的な協力が進めば、天気予報は百パーセント的中するようになるのでしょうか。それはかなりむずかしいというのが、現在のわたしの考えです。

⑦ それでは、突発的・局地的な天気の変化を予想するために、できることはないのでしょうか。わたしは、いくつかの手立てがあるのではないかと考えています。

新版では、問いの後にすべて、すぐに答えを述べている。厳密には、その後の段落でさらに詳しく述べているのだが、問いの直後に大きく答えを示しているのである。つまり、新版は述べ方を統一したのである。

二点目は、説明的文章における問いの意味である。これらの箇所は、次のように書き換えても意味の上では全く差し支えない。

① ~的中率が高くなったのは、主に、次の二つの理由によります。

④ しかし、科学技術が進歩し、国際的な協力が進んでも、天気予報が百パーセント的中するよう

になるのはかなりむずかしいというのが、現在のわたしの考えです。

7 わたしは、突発的・局地的な天気の変化を予想するために、いくつかの手立てがあると考えています。

説明的文章における問いは、必然性をもつものではない。問いがなければならぬのではなく、問いの形で示すことで、読者の注意・関心を惹きつけているのである。説明的文章における問いは、筆者がわからないから問うているのではない。筆者は答えをわかった上で、問いを出しているのである。だから、問いの形ではなく、ふつうに説明することが可能なのである。

では、なぜわざわざ問いの形にしているのだろうか。それは、問いの形で示すことで、筆者がこれから説明しようとすることに、読者の関心を向けさせる働きがあるからである。読者の目を、筆者の指し示す方向に向けさせる働きとってよい。このことは、これまでも述べてきていることだが、説明的文章における問いの役割として常に確認しておきたい。説明的文章が必然的に問いの文を求めるものではない。説明的文章の中に常に問いの文があるわけではない。しかし、筆者の説明したいこと、明らかにしたいことがあるからこそ、説明的文章は書かれるのである。それゆえに、説明的文章には常に問いが内包されているとってよい。それを筆者の問題意識とってよいだろう。問いの文は、その問題意識の顕在化といえるのである。

次に、10段落。旧版では次のように述べられていた。

科学技術の進歩や国際的な協力の実現によって、天気予報の精度は年々向上しています。～  
新版は次のようである。

科学技術の進歩や国際的な協力の実現によって、天気予報の精度は向上してきました。～

ほとんど同じようにも見えるが、この微妙な差異に着目したい。すでに4段落で「さらに科学技術が進歩し、国際的な協力が進めば、天気予報は百パーセントの中するようになるのでしょうか。それはかなりむずかしいというのが、現在のわたしの考えです。」と述べていた。新版には、「東京地方の降水の予報精度(5年平均)」で2006～2010年までのデータが付け加わったことは、初めの方で述べた。1971年から5年毎の的中率は2001年～2005年まで下がることなく、上昇してきている。しかし、2006～2010年は85.6%で、2001年～2005年の86.4%から、0.8%下がっているのである。旧版には2006～2010年のデータがないから、ずっと上昇している感じになるのだが、新版では最近になって少し的中率が下がっていることが読み取れる。その要因は5～6段落に述べられていた。つまり、旧版の「天気予報の精度は年々向上しています」だと、これからも少しずつではあっても、天気予報の精度が高くなっていくということになる。しかし新版の「天気予報の精度は向上してきました」は、これまでは向上してきたが、これからも向上していくとは限らないという読みが可能になる。現に2006～2010年での的中率は若干下がっているわけだし、ゲリラ豪雨の問題は、近年私たちが身近に体験したり聞いたりする話題でもある。「年々向上しています」から「向上してきました」への変更は大した違いではないように見えるが、より厳密な書かれ方になったといえよう。

したがって、その後に述べられる「科学的な天気予報を一つの有効な情報として活用しながら、自分でも天気に関する知識をもち、自分で空を見、風を感じることを大切にしたいものです」という筆者の意見に、より説得力を持ってつながっていく。

この文章の構成を、私は次のように考えている。

本論 1	1～3 段落 (的中率は どうして 高くなったのか?)
本論 2	4～6 段落 (的中率が 100%にならないわけ)
本論 3	7～9 段落 (突発的・局地的天気を予想する手立て)
結び	10 段落

この文章には「序論」がない。「天気を予想する」という題名が話題提示の役割を果たしており、いきなり本論に入っている。そして、この文章では大きく 3 つのことが述べられている。しかし、それは 3 つが並列に述べられているのではない。「本論 1」を受けて「本論 2」があり、さらにそれを受けて「本論 3」がある。順序に必然性があるのだ。言い方を変えれば、「本論 1」から「本論 3」に向けて絞り込んでいくような書かれ方といえる。つまり、この述べ方は 3 つのことを述べている文章だという理解だけでなく、「本論 3」の部分に筆者がより伝えたいことがあるのではないかと考えることが可能となる。

「本論 1」では、「的中率が高くなった」理由を科学技術の進歩や、気球による観測や静止気象衛星による情報などの国際的な協力によるものとして、話のスケールは地球規模といてよい。「本論 2」では、「天気予報が百パーセント的中するようになるのはかなりむずかしい」要因として「突発的・局地的な天気の変化」をあげる。これは、日本を対象にした話である。そして「本論 3」で問題にしているのは、「自分で空を見たり、風を感じたりすること」であり、「長い間の人々の経験が積み重なってできたもの」である。話の規模が、地球的なところから、日本に、そして身近なことへとだんだん狭まってきているのである。

改めて、10 段落を見てみよう。

科学技術の進歩や国際的な協力の実現によって、天気予報の精度は向上してきました。それによって、わたしたちの生活はますます便利になっています。しかし、いくらの中率が高くなっても、「今、ここ」で天気の変化を予想し、次の行動を判断するのは、それぞれの場所にいる一人一人なのです。そのことをわすれず、科学的な天気予報を一つの有効な情報として活用しながら、自分でも天気に関する知識をもち、自分で空を見、風を感じることを大切にしたいものです。

このまとめがよいのは、取ってつけたような押し付け感がないことである。

しかし、いくらの中率が高くなっても、「今、ここ」で天気の変化を予想し、次の行動を判断するのは、それぞれの場所にいる一人一人なのです。そのことをわすれず、科学的な天気予報を一つの有効な情報として活用しながら、自分でも天気に関する知識をもち、自分で空を見、風を感じることを大切にしたいものです。

という筆者の意見を聞いて、自分がどうすればよいのかがわからない人はいないだろう。

次のような、〈結び〉の文と比較すると、その良さが際立っていることがわかる。

自然からの警告を見のがさない。それが今、私たちに求められていることだろう。皆さんの家の近くの小川や野原、そこに生きるホタルやメダカなどの生き物に何か変化が起きてはいないだろうか。一つ一つは小さなことでも、それらがつながり合って私たちの星・地球は成り立っている。身近な自然をしっかりと観察し、大切にしていくことが、豊かな地球を守る第一歩となるだろう。

「流水とわたしたちの暮らし」(光村図書・中学 1 年)

「身近な自然をしっかりと観察」することは出来ないことではない。しかし、この文章を読んだだれもが、明日からやってみようと思うだろうか。ましてや、「身近な自然をしっかりと観察し、大切にしていくこと」が、「豊かな地球を守る」ことにつながるというのだが、本当にそう言えるだろうか。地球規模での問題を一人ひとりの心がけの問題にすり替えてしまっているのではないか。地球規模での環境を守る問題では、国家や大企業の果たす役割が大きい。例えば、中国方面からやってくる PM2.5 の問題は、私たちが「身近な自然をしっかりと観察し、大切にしていくこと」では解決できない。

しかし、現実には教科書にある説明的文章教材では、このような一見わかったような、その実よくわからない「道徳的」な終わり方をする文章がしばしば見られる。

確かに天気という、私たち一人一人に身近な問題を取り上げているという素材のよさもあるが、押し付けにならずに、一人一人が自分で判断することの大切さを主張するまとめかたは、道徳的な要素を持ちつつも、無理矢理の押し付けでもなく、また観念的なものでもなく、すんなりと納得できる終わり方といえる。